

新任教員紹介



史学科特任教授

阪田 正一

立正大学大学院文学研究科史学専攻において考古学を学び、昭和四十七年三月に修了した後、千葉県教育委員会において埋蔵文化財の調査研究や指定文化財の保護行政、さらに博物館の経営に関する仕事を勤めてきた関係であろうか、この四月から本学の博物館学芸員課程を担当することとなった。

大学院においては奈良・平安時代の集落遺跡の研究をし、千葉県において多くの当該期の集落遺跡を発掘調査することができたのは今かれずれば恵まれた環境にあっただと思っている。集落構造の変遷を考える上に必要な事項を種々想定し実践することもでき、様々な情報を得ることができた。しかしながらこの点に関する私見を示すことができないでいるのは遺憾といえようが、集落遺跡

研究では遺跡単位で共同体は完結することは考えづらく、複数の遺跡の資料を渉猟しなければならないところである。

研究に欠くことのできない資料は均質であることが望まれるが、現状は必ずしもそのようではなく、均質にするための作業が質を低下させることになる。したがって集落遺跡研究では同一調査者による複数の集落遺跡に関する資料が報告書としてまとめられることによって均質な資料を得ることができ研究ができるということになるわけである。このことが現状では望めないことから、私自身としても集落遺跡研究に距離をおいている。

現在は、中世から近世に造立された題目板碑など日蓮宗に関する塔婆の研究を進めている。この塔婆は個々に特徴をもち存在する資料であり、銘文が改竄されるということもないわけではないが恣意的な資料というものは皆無であるといえる。であるから資料批判は行いが、私自身として資料を採取し資料化をすれば研究対象の資料として活用することが可能であると考えている。

題目板碑は種子系板碑から六十年ほど遅れて造立され

る。現在、最古の題目板碑は東京池上本門寺の大坊が護持する正応三（一二九〇）年在銘のもので、残念ながら完全な形をとどめておらず分明でない点があるものの、法華経の偈頌が彫り込まれているものであり、この正応三年在銘の題目板碑が造立された背景などを含め題目板碑の濫觴と終焉という問題を今後の課題として研究を進めて参りたいと考えている。

大学の講義においては博物館学をはじめ学芸員課程の講座を担当し博物館学芸員を目指す学生諸君に些かなりとも今までに経験してきたことを伝えることができればと考えている。博物館を取り巻く状況は必ずしも安穏ではない。大手百貨店に併設された美術館が相次いで閉館され、公立博物館では行財政改革の一連の対応として統廃合されるという状況がある。博物館あるいは美術館という教育施設が次第に姿を消していくことは経済的価値が優先し普遍的価値が失われることであり、伝統的な文化を保存し後世に継承していく使命を担う博物館の立つところが危ういこととなっている。一方では博物館法の改正によって博物館登録制度の見直しや学芸員養成課程

の見直しがいわれており、学芸員については専門的な知識を保有すること、博物館資料に関する実践技術を保有すること、来館者とのコミュニケーション能力を保有することなどが求められることになろう。このような社会的な要請に応えられるような学芸員の育成を課程では目指し参りたいと考えている。